Irfan Habib
An Atlas of the Mughal Empire

近　藤　治

著者のイルファン＝ハビーブ教授はインド、アリーガル大学の著名なムガル朝史家である。彼の名はムガル朝土地制度史の精緻な研究書 *The Agrarian System of Mughal India*, Bombay, 1963 によってつとに内外によく知られており、近くはその共編著 *The Cambridge Economic History of India*, Vol. I, Cambridge, 1982 も刊行された。

本地図帳はその彼が長年月を費して完成させた大業である。類書としては J. E. Schwartzberg, *A Historical Atlas of South Asia*, Chicago-London, 1978 があるが、これは多数の学者と製図家を動員した共同作業による南アジアの歴史地図帳であるのに対して、ハビーブの地図帳は三人の製図家および製図家修業中の子息フェイズ＝ハビーブの協力をえたほかは、ほぼ独力で完成させたムガル帝国時代の歴史地図帳である。

ところでアクバル時代、アブル＝ファズルによって著わされた大作の書『アクバル会典』(*Āīn-i Akbarī*) は帝国の一二州についての詳しい地誌部を収める。これを地図の図面上に表わそうとする試みは早くも一八四四年、エリオット (Henry M. Elliot) が英領北西州におけるアクバル時代の行政区分地図を描いた作業となって現れた。これを承けてビームズ (John Beames) は同様の地図をアワド・ビハール・ベンガル・オリッサの各地域について作製した。しかしこれら以外の地域については中断されており、しかもこれらの地図は今日ではほとんど人目に触れることがなくなっている。ハビーブの地図帳はインド亜大陸をアフガニスタン北部から南インドに至るまで一六の地域に区分し、それぞれの地域について縮尺二〇〇万分の一の政治地図と経済地図とを別々に提示する形体をとっているが、このうちの政治地図は右に述べたエリオットとビームズの仕事を改訂、継承し、完結させたものということができる。とはいっても一六葉のうち四葉を除く一二葉は、ハビーブが今回全く新しく用意したものである。しかもエリオットやビームズの地図と異なり、この地図帳は後にも述べるように『アクバル会典』のみの地誌的情報によらず、ムガル朝時代の様々な資料からえられる情報を総合して図面上に表わしたものとなっている。

著者によって一六に区分された各地域は多くの場合ムガル帝国の州区分と照応し、さらに英領時代の行政区分や独立後のインドの州区分とも照応しているので、比較考察するのに便利である。南インドは北緯一六度以南の地域とされている。これら一六地域を総合した帝国全体の政治地図と経済地図も描かれている。また冒頭部には、各州下の県 (sarkār) ごとの面積と地租評定額――ただしデカン地方諸州の県については面積のみ――を示した一覧表も掲げている。

各地域について描かれた政治地図と経済地図のうち、まず政治地図では首都や州都からはじめて郡 (maḥal, pargana) およびそ

の中心地に至るまでの地名をすべて網羅的に示している。またそれ以下のレヴェルの村名についても、重要なものは収めている。境界線としては州境と県境が示されており、いくつかの郡を統合して徴税区域が設定されていたところはその境界線も示されている。地名表記法は、地図では慣用表記が使用され、注解および巻末の完備した索引では正音符を付した正確な表記が慣用表記と併せて記されている。従って読者はこの索引によって、ムガル時代の地名表記と現代の慣用表記をそれぞれ対応させてみることができる。例えば Dihlī—Delhi, Gawāliār—Gwalior のごとくである。なお正音符を付す転写法は、スタインガス(F. Steingass)のペルシア語辞典がムガル朝インドのペルシア語を表記するのによく適しているとして、その原則に拠っている。

経済地図の方では、山脈・丘陵・高原・砂漠・河川・森林などの自然地形や動物(象・馬・野牛・豹・羊・牛・ラクダ・ヤク・水牛等)が詳しく記入されている。これでみると河川の流路の異同はもとより、森林地帯についても当時は現代よりも相当に広範囲に広がっていたことがわかる。また交通・運輸に関しては交通路網、橋、浅瀬(渡河地点)、渡船場、河川交通とその航行可能船の最大積載トン数、海港とその寄港可能船の最大積載トン数が文献によって確認される範囲で記されている。各種の工産物・鉱産物・農産物・果物・養蚕等が表示されているのもいうまでもない。パンジャーブ、ラージャスタン、ウッタル=プラデーシュの三地域の小麦作地については一ビーガ(bigha 約二四アール)当りの地租徴収額も記されている。アクバル時代の銀貨・銅貨の鋳造所、アウラングゼーブ時代の銀貨の鋳造所も示されている。

従来、ムガル朝インドに関するこの種の経済地図は皆無の状態であった。私たちはこの地図帳から、ことムガル朝インド経済に関しても実に豊富な情報を得ることができるようになったわけである。以上の政治地図と経済地図は南北のアフガニスタンに関してのみは、それぞれ一つの図面に合して描かれている。

地図帳の後半部は政治地図、経済地図の各図面についての精細な注解に当てられている。図中の地名およびその所在地、境界線、河川の流路、交通路、産物等そのほとんどすべての記載事項について、ムガル朝時代のインドに関する諸資料を参照して一つひとつ吟味したもので、大版三段組六七ページにのぼるこの部分は優に一書に匹敵する分量であり、内容的にも、さながらムガル朝インドの政治経済地理に関する出典辞典の観を呈している。その出典についていえば、地理的情報はさまざまな文献、とりわけこの時代に多くなる歴史書のあちこちに散見される。そこで著者は『アクバル会典』をはじめとするペルシア語文献、刊本未刊の写本類、公私の文書類、旅行記など当時の資料はもとより、後世になって作製された地図類や諸研究に至るまで、広範な資料を博捜して援用している。著者は歴史書に頻繁にみられる皇帝や軍隊の移動に関する記述にも注意を怠らない。本書のはじめに付された著者の詳しい解説によれば、主要な出典文献とされた『アクバル会典』に記述されている郡の総数は三、〇五三。このうち二、一八七郡のみが地図上に記入されており、残る八六六郡(全体の二八・四%)はその位置を比定することが不能だったという。このような比定不能の郡が多かったのはパンジャーブ、シンド南部、マールワ、ベンガルの各地域であった。また総計四千を越える地名の分布状

況を政治地図上において調べてみると、地名記載の多いところと人口の多いところとは相関関係にあった、ともいう。

巻末には繊維製品語彙集、略語一覧、文献目録、索引、それに正誤表が付されている。繊維製品語彙集のところでは七〇項目の用語について出典を挙げた簡潔、明解な説明が与えられており、文献目録のところでは本書に引用されたすべての文献、資料類が一括、整理して載せられており、詳細な索引と並んで、本書の価値を一層貴重なものとしている。

以上、本書の特色に触れながらその構成内容を概略紹介した。ここで、グジャラート地方の記述と金・銀・銅等鉱産物の記述とについて、もう少し詳しく紹介しておくことにしよう。グジャラート州にはアフマダバード・パタン・ナーダウト・バローダ・ブローチ・チャンパーネール・スーラト・ゴードラ・ソーラトの九県とスーント・アリー＝モーハン・ラージピープラ・ラームナガル・バグラーナ・カチュ・小カチュの七つの土侯領地から成り立っていた。ここはムガル帝国の西部に位置した生産性の高いところであり、キャンベイ湾に面した帝国第一の港市スーラトを擁した重要州であった。そのスーラトの町はタプティ川の河口を約二〇キロメートル遡ったところに位置しており、大きな外洋船は寄港が困難であったので、河口部の外港スワーリーがそれに当てられた。スーラトは単なる港湾都市ではなく、造船業の盛んなところであり、また綿織物・絹織物・漆器の生産も行われた。スーラトとともに、州都アフマダバードにとって重要な役割を果した港はゴーガ港であった。キャンベイ湾の対岸に位置したこの港はアフマダバードに一層近く、しかも一、五〇〇トンの外洋船（ただし一六世紀の一トン当りの容積は現行の約六割）の寄港が可能とされた。ここで船荷をボートに移しかえ、キャンベイ湾の浅瀬を湾頭のキャンベイ港まで運び、そこから陸路アフマダバードへと運んだり、またその逆が行われたのである。キャンベイの町は、スーラト同様、アウラングゼーブ時代に銀貨鋳造所の置かれていたところであり、またここでは象牙・紅玉・瑪瑙の加工や、モスリン・絹織物・寝具の生産も行われた。近くではインディゴ生産も行われたが、アフマダバード南郊のサルケージがグジャラートでは最も有名なインディゴ生産地であった。アフマダバードはグジャラートの政治の中心であったのみならず、次のような工業製品を生産する経済都市でもあった。それらは天鵞絨・繻子・綾織・錦織・金銀刺繍・絨緞・更紗・キャラコ・寝具・象嵌細工・彫物・紙などである。またここはアクバル時代、アウラングゼーブ時代ともに銀貨鋳造所の置かれたところである。ただしキャンベイとここで鋳造される銀貨はムガル朝の標準銀貨であったのに対し、スーラトで鋳造され、ブローチ・バローダ・ゴーガなどで使用されていたものはマフムーディー銀貨であった。その通用範囲も地図の中に明示されている。

ウッタル＝プラデーシュ地域の経済地図に、アグラ州とアワド州との州境にほぼ沿って「米作線（Rice Line）」が引かれているのが注目される。これはこの線の東側、すなわちアワド州においては米が主要作物であったのに対して、西のアグラ州においてはそうではなかったことを示している。またカシュミールの経済地図では、スリナガルとウーラル湖との間を結ぶ交通路に「河川が主要交通手段、渓谷で使用されるボート五、七〇〇隻」との説明

句が記入されているところも面白い。

次に鉱産物であるが、本書によるとダイヤモンドと鉄の産地は当時のインド各地にかなり広く分布していたことが分るのに対し、金・銀という貴金属の産地となると比較的少なく、銅鉱の産地も多くはない。金はほとんどの場合砂金から採取されていた。それらを含む金産地として挙げられるのは、カシュミール州東部のグゲ(Guge)地方・同北部のインダス川上流地方・隣接の西部チベット地方・ギルギットおよびダーラッド(Dārad)地方、パンジャーブ州のインダス川流域ダンゴート(Dhangot)北方・ジェーラム川上流域・ベアース川流域タータールプル・ジャムナ川上流バシャハル(Bashahar)の各地、グジャラート州のギルナール(Girnār)山地、デリー州の東北山中にあるスリナガルおよびその南方のクマーオーン(Kumāūn)地方、アワド州のアワドおよびその北方ガーガル川上流域、ベンガル州東部ティパラ(Tipara)地方およびブータン地方、それにアッサム地方のブラフマプトラ川流域一帯、などである。とくに最後のアッサム地方の砂金採取には一万二、〇〇〇人ないし二万人の労働者が従事していたという。

銀産地としては、パンジャーブ州東部のクルー(Kulū)山地、ラージャスタン(アジュメール)州のソージャト(Sojat)・ジャイターラン(Jaitāran)・ウンチャ(Uncha)の各地、デリー州のクマーオーン地方、マールワ州のナルバダー川流域ジョーガー(Jogā)、アッサム地方北部のウッタル＝クール(Uttar-kūl)地方などがある。また銅産地としては、パンジャーブ州東部のスケート(Sukhet)およびマンディー(Mandi)、ラージャスタン州のバイラート(Bairāt)・シンガーナ(Singhāna)・ヴダイプル・バーバーイ(Bābā'ī)・ダーマニコー(Dāman-i Koh)・ラーイプル(Rāipūr)・コート＝プトリー(Koṭ Putlī)・コートリー(Kotrī)・チャインプル(Chainpūr)・キシャンガル(Kishangar)の各地、デリー州のクマーオーン地方、アワド州北部チベット寄り山中などが挙げられる。ラージャスタン州に銅産地がかなり集中しているが、その中でもバイラート産の銅鉱は純度がきわめて高い良鉱として有名であった。ムガル帝国期には金・銀等の貴金属が大量に消費されており、これらは対外貿易を通しても相当量流入していた。また銅も日本産銅をはじめとして、かなり輸入されていた。このような外国産の金・銀・銅の流入と国内産のそれらとの流通上の対応関係を考えていくうえでも、本書は有効な情報を提供してくれる。

さて以上のような本書の構成、内容に関する簡略な紹介につづいて、最後に気付いたことを二、三記しておきたい。第一はラージャスタン州東南部のチャンバル川上流に位置した都市コータ(Kotā)に関してである。一八世紀後半にインドを訪れたフランス人モダーヴ伯の旅行記(*Voyage en Inde du Comte de Modave 1773-1776, Nouveaux mémoires sur l'état actuel de Bangale et de l'Indoustan*, texte établi et annoté par Jean Deloche, Paris, 1971)によると、当時この町はデリー・ジャイプルと並んで三大馬市開催地の一つであり、西北方から購入される馬はいったんパンジャーブの集散地ラホールに集められたのち、これらの三大市場に送られ、そこからさらに各地へと引取られていくのを常とした。ラクダについても、コータはその大市場であったとい

う。モダーヴ伯はこの町を訪れ、ここが交通上の要衝を占めていることも観察していた（詳しくは拙稿「ムガル朝時代を中心とするインド国内交易路の変遷について」『追手門学院大学文学部紀要』第一五号、一九八一年参照）。ところが本書では、コータはラージャスタン州の政治地図にのみその位置が記されていて、経済地図の方では省略されている。ここを通り南のウッジャインへと通ずる交通路についても記されていない。本書が主要な対象時期とする一六・一七世紀においては、モダーヴ伯の旅行当時と事情が大きく異っていたというのであろうか。むしろ著者自ら認めるように、ヨーロッパ人の残した諸記録は英語で利用可能なものに限られたというところから、このような記載もれがきているように思われる。してみると、ペルシア語諸資料はいうに及ばず英語諸資料も博く援用されているとはいえ、なお右のような事例は他にも考えられうるところであり、今後に豊富化ないし修正していくべき余地がまだ残されているというべきであろう。

第二に再度交通路についてだが、アジュメール―アグラ間の主要ルートとして地図に描かれているものが実は副ルートとすべきものであって、主要ルートはもう少し北寄りを通っていたという点についてはすでにフランスのドゥローシュ（Jean Deloche）教授が本書の書評文で指摘しているところである（*The Indian Economic and Social History Review*, Vol. XIX, Nos. 3/4, 1982, p. 409）。そのことはおくとしても、私が解せなかったのはラージャスタン州マルワール地方の中心都市ジョドプルがこの地方を通る幹線ルートから外されている点である。また港市スーラトとハンデーシュ州都ブルハーンプルとを結ぶタプティ川にほぼ沿った交通路は非常に重要なルートであり、タヴェルニエはじめ多くのヨーロッパ人旅行者もこれを利用した。本書ではこのルートを関連地域の経済地図では明示しているが、帝国全体を総合した経済地図では省いてしまっている。この交通路は後者においても当然明示しておくべき重要ルートであると、私は考える。

第三に南インドの描写が北インドのそれに比べて見劣りする点である。しかし、これは著者の責任というよりも、ドゥローシュ教授もいうように、むしろこれからの歴史研究者たちの課題というべきであろう。

ともかく本地図張は一人の著者の手によってなされた画期的な仕事である。確かにシュワルツベルグ編の地図帳は良質の紙を使用した多色刷の立派な印刷・製本であった。本地図帳も印刷にもう一工夫あれば、著者の努力がもっとよく表現されえたのではなかったかとの感がしなくもない。とはいえ本書は、著者はいうに及ばず製図家、紙、印刷、出版に至るすべてがいわばインドの純国産である。普及を考慮して適度の価格内に抑えようとすれば、あるいは本書のような印刷にならざるをえなかったのかもしれない。しかし内容的には、ムガル帝国期の歴史地図帳としての本書が、シュワルツベルグ編書の当該箇所と比較しても文句なく詳しいことはいうまでもない。

序文によると本書の構想と準備は、著者がジャワーハルラール＝ネール記念財団から二年間（一九六八―七〇）にわたる学術奨励賞を受賞したときから進められた。一九六八年九月、私が留学先のパキスタンからインドのアリーガルに著者を訪ねたとき、たまたま著者は学会出席のため渡米中で会えなかったが、このとき

父君の故モハンマド＝ハビーブ教授夫妻から右の名誉ある学術奨励賞受賞の話を聞いた。一九七五年の夏再びアリーガルを訪ねたとき、今度は著者から、この地図帳作製作業に当てられていた研究室で、綿密に描かれていた地図の原図を見せてもらいながら説明を受け、刊行が近いことも知らされた。しかし刊行はそれからさらに七年も先に延び、結局完成までに都合一四年の歳月が費されたのである。本地図帳作製の当初からその進行状況を多少とも知っていた者の一人として、私は本書の完成を心から喜ぶとともに、著者の持続的な超人的努力に深い敬意を払って、この書評を閉じさせていただく。

(Delhi : Oxford University Press, 1982, 32 maps. xvii+105 pp. 43.1×27.7cm.)

(追手門学院大学教授　　)